

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H03960

研究課題名(和文) 精神障がい者の予防的・家族包括的育児支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Preventive and Whole Family-Inclusive Parenting Support Programs for Persons with Mental Disorders

研究代表者

蔭山 正子 (Kageyama, Masako)

大阪大学・高等共創研究院・教授

研究者番号：80646464

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：1)恋愛・結婚に関する研究班：愛する力磨くプログラム「あいりき」の介入研究を予定対象者数まで実施し、効果評価を行った。対象者の自己肯定感、希望、コミュニケーションにおいて有意な向上が認められた。介入研究について英語論文として公表した。2)育児に関する研究班：精神障がいを抱えながらの子育て支援に関する研修動画の効果評価について英語論文に公表した。3)子どもに関する研究班：精神疾患の親をもつ子どもを支援するための学校教員向け動画の開発を進めた。支援の困難感の軽減、対処可能感の向上、精神保健スキルの向上、知識の獲得に有意な効果がみとめられた。介入研究の結果を英語論文に公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神疾患のある親の育児支援に関して、支援技術を向上させる研修プログラムを開発したことは、国内では初めてであり国際的にもわずかであるため、学術的な意義がある。精神疾患のある人の恋愛や結婚に関する介入プログラムは国際的にもわずかであり、学術的な意義がある。また、親を直接的に支援する母子保健や児童福祉の専門職向けに研修動画を作成し、無料で視聴できるようにした。また、親に育てられる子どもを支援する学校の教員向けにも研修動画を作成し、無料で視聴できるようにした。恋愛や結婚に関するプログラムも実践できるようにしており、社会的にも意義がある。

研究成果の概要(英文)：1) Romantic relationships: We have conducted an intervention study of "AIRIKI," a program to improve one's ability to love, up to the planned number of subjects, and evaluated its effectiveness. Significant improvements were observed in the subjects' self-esteem, hope, and communication. The intervention study was published in English. 2) Child-rearing: An evaluation of the effectiveness of a training video on support for child-rearing of persons with mental disorders was published in English. 3) Children of persons with mental disorders: We developed a video for school teachers to support children of persons with mental disorders. Significant effects were found in reducing the sense of difficulty in providing support, improving the sense of supporting, improving mental health skills, and acquiring knowledge. The results of the intervention study were published in an English.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：精神障害 育児支援 母子保健 子ども支援 ヤングケアラー 介入研究 恋愛 結婚

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

精神障がいのある人が今後より一層地域で暮らすようになると考えられるが、恋愛、結婚、育児に関する研究は十分になく、支援プログラムはほとんど存在しない。

2. 研究の目的

本研究では、精神障がい者が親になり、その配偶者や子とともに家族で幸せな生活を送れるようにするために、彼らの障壁を明らかにするとともに、効果的かつ実現可能性・普及可能性の高い支援プログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 恋愛・結婚の障壁

精神障がい当事者が認識している恋愛・結婚の障壁を明らかにすることを目的とした。精神障害者保健福祉手帳を所持している者 18 名にフォーカスグループインタビューを行い、質的記述的に分析した。インタビュー項目は、「恋愛・結婚に関し、どのようなことが障壁となっていると感じますか」「どのようにして障壁を乗り越えましたか」「どのようなサポートがあれば障壁を乗り越えることができますか」といったものであった。1 グループ 3~4 名で 5 グループ、平均 90 (84-99) 分であった。

2) 恋愛支援のプログラム開発

精神障がい者を対象に、サービス利用者との共創プロセスを通じて、親密な人間関係や恋愛関係についての 4 時間のピア主導型学習プログラムを開発し、その予備の効果と実施可能性を検討することを目的とした。精神障がい者 45 名を対象に、混合法デザインを用いて 1 群事前事後試験を実施した。アウトカムデータは、ベースライン、介入後、プログラム終了 1 ヶ月後の 3 時点で収集された。プロセス評価のためにグループインタビューを行った。

3) 育児の支援ニーズ

精神障がいを抱える親の妊娠から子育てにおける支援ニーズを当事者の認識に基づいて具体的に記述することを目的とした。質的記述的研究とした。18 歳未満の子を持つ精神障がいと診断されている親 10 名 (女性 8 名、男性 2 名) に個別の半構造化面接を行った。逐語録から「当事者の支援ニーズとはどのようなものか」という視点でコードを作成し、抽象度を上げて小・中・大カテゴリを作成した。

4) 育児支援研修のプログラム開発

精神障がいのある親とその家族を支援するための保健師 (PHN) 向けの e ラーニングプログラムを開発し、その有効性を評価することを目的とした。プログラムの有効性を評価するために、全国の市保健センターで母子保健を担当する PHN に協力を依頼した。参加者が無作為に先行群と後行群に分かれてもらうランダム化比較試験を行った。介入前 (T1)、介入後 (T2)、1 ヶ月後 (T3) の 3 時点において、自記式ウェブアンケートで回答してもらった。

5) 子ども時代の生活実態および相談状況

精神疾患のある親をもつ人を対象とし、小・中・高校時代の体験および学校での相談状況を把握することを目的とした。精神疾患のある親をもつ成人の会に参加したことのある 240 名を対象とし、ウェブ上のアンケート調査を実施した。

6) 子ども時代の情緒的ケアと成人後の精神的健康との関連

成人した精神疾患の親の子どもの現在の心理的苦痛の経験が、虐待やネグレクトを受けた経験や、幼少期に親の精神的ケアを行った経験と関連しているかどうかを明らかにすることとした。20 歳以上の参加者 120 名から回答を得た (回答率 50%) ウェブベースの横断研究のデータを使用して分析した。このうち 94 名には精神疾患と診断された親がおり、これらの参加者をデータ分析の対象とした。

7) 成人後に残る生きづらさ

精神疾患の親を持つ子どもの成人後の生きづらさとはどのようなものか、どのように生じたか認識されているかを記述することを目的とした。精神疾患の親を持つ成人 7 人に個別の半構造化面接を実施し、質的記述的に分析した。

8) 学校教員向けの子どもの支援のための研修プログラムの開発

精神疾患を持つ親を持つ子どもを支援するための小学校教員研修用 e ラーニング・プログラムを開発し、その有効性を検証することとした。このプログラムは、30 分間のビデオによる e ラーニングを含むもので、学校の教師が精神疾患や精神疾患を持つ親の子どもに関する基本的な知識を身につけ、支援を必要とする子どもを認識し、支援に自信を持てるようにすることを目的としたプログラムである。学校ベースのクラスター無作為化比較試験が実施され、学校が無作為に介入群と対照群に分けられた。これらの学校の教師はプログラムに登録し、個別に参加した。教師たちの成果指標は、ベースライン (T1)、直後 (T2)、1 ヶ月後 (T3) の 3 時点で評価された。対処困難感下位尺度 (主要アウトカム尺度) とともに、以下の独自に作成したアウトカム項目が用いられた: 子ども支援に対する実際の行動と態度、知識、プログラム目標達成の自己評価。T3 時点の対処困難感下位尺度の結果を群間で比較した。経時的効果は、すべての結果指標について評価された。対処困難感下位尺度におけるベースライン効果と介入効果の相互作用が分析された。プロセス評価の一環として、自由形式のテキスト回答が質的に分析された。

4. 研究成果

1) 恋愛・結婚の障壁

当事者の恋愛・結婚の障壁として、11のカテゴリが生成された。当事者自身における障壁として、【症状の影響による安定した関係の築きにくさ】、【恋愛・結婚の知識と経験を得る機会の不足】、【恋愛に対する自信のなさ】、【一般就労の困難からくる経済的な不安定さ】、【子を作ることへの躊躇】があった。パートナーとの関係性における障壁としては、【当事者であるパートナーの症状や不安から受ける影響】、【健常者であるパートナーの疾患に対する理解不足】があった。パートナー以外の家族との関係性における障壁としては【実家やパートナーの家族による反対】、支援者との関係性における障壁として【支援者の考えや施設のルールによる反対】、周囲の人との関係性における障壁として、【結婚後の住居確保の困難】、【当事者は恋愛対象ではないという考え】が認められた。

2) 恋愛支援のプログラム開発

MMRMの解析では、RSES、RAS、HHI、そしてオリジナルの2つの項目「自分のことを他人と上手にコミュニケーションできる」と「他人の話を上手に聞ける」において、経時的に有意な変化が示された。多重比較では、RSESとHHIはプログラム開始1ヵ月後に有意な変化を示した。参加者は、プログラム参加後1ヶ月の間に、恋愛関係に対する積極性(n=14)、恋愛行動を起こす(n=11)、全体的なコミュニケーションの向上を感じる(n=11)といった変化を報告した。また、プログラム参加に起因すると思われる予定外の精神科受診が2名あったが、1ヵ月後には全員が回復した。

3) 育児の支援ニーズ

支援ニーズは妊娠期から学童期までの時期、支援者の違いを検討した。精神障がいを抱える親の支援ニーズとして【病気で差別されない・しないようにしてほしい】、【妊娠・授乳中に服薬の説明や病状悪化時の備えがほしい】、【病状や障がいによる家事や育児のできないところを補う支援がほしい】、【障がいを抱えながらも親であれるように支えてほしい】、【連携して親子を支援してほしい】、【身近なところで気にかけて話を聞いてほしい】の6つの大カテゴリが抽出された。

4) 育児支援研修のプログラム開発

主要な効果指標である支援の対処困難感・可能感尺度については、1ヵ月後(T3)で2グループを比較することで評価した。経時的な効果は、反復測定混合モデルを用いて評価した。参加者は合計176名だった。対処可能感・困難感尺度は、1ヵ月後(T3)に先行群が後行群よりも有意に高くなっていった(平均値の比較、共分散分析)。効果の大きさを示す効果量(Cohen's d)は、対処可能感・困難感尺度で1.19、対処困難感で1.27と大きな効果が見られ、対処可能感は0.65と中等度の効果だった。

5) 子ども時代の生活実態および相談状況

120名から回答を得た。年齢は20歳代から50歳以上まで幅広く、女性が85.8%だった。精神疾患をもつ親は、母親のみが多く67.5%であり、親の精神疾患推定発症年齢は、回答者が小学校に入るまでが73.1%だった。ヤングケアラーとしての役割は、小・中・高校時代で親の情緒的ケアが最も多く57.8~61.5%が経験し、手伝い以上の家事は29.7~32.1%が経験していた。学校への相談歴の無かった人は小学生の頃91.7%、中学生の頃84.5%、高校生の頃で78.6%だった。相談しなかった理由としては、問題に気づかない、発信することに抵抗がある、相談する準備性がない、相談環境が不十分というものがあった。相談しやすかった人は、全ての時期で担任の先生が最も多かった。30歳代以下の方は、40歳代以上の方に比べて小学生や高校生の頃に学校への相談歴がある人が有意に多かった。

6) 子ども時代の情緒的ケアと成人後の精神的健康との関連

回答者94人のうち65人(69.2%)は、苦悩が高かった。ロジスティック回帰分析の結果、学童期に両親の精神的ケアを行った経験は、成人期の高い苦悩と有意に関連していた(OR = 3.48; 95% CI 1.21-9.96)。攻撃的行為やネグレクトに幼少期にさらされたことと、現在の苦悩レベルとの間には有意な関係は認められなかった。

7) 成人後に残る生きづらさ

研究協力者の親は6人が統合失調症、1人が妄想性障害だった。成人後の生きづらさには、【母親との関わりや思いが母親の世界が自分の人生の足枷となっている状態】、【母親と過ごす中で行動、思考の癖がしみついた後遺症のような状態】、【親から学べるはずの生きる術が乏しい状態】、【トラウマ体験にとらわれている状態】、【本来の自分や、自分で自分のために生きることがわからない状態】、【他の家庭環境と比べて辛くなる状態】があった。

8) 学校教員向けの子どもの支援のための研修プログラムの開発

介入群87名、対照群84名からベースラインの回答を得た。T3時点での対処困難感下位尺度の合計得点は、介入群で対照群よりも有意に低かった。時間の経過とともに、対処困難感下位尺度、実際の行動、発症時期および発症確率に関する知識、すべてのプログラム目標の達成度において有意な効果が観察された。探索的分析は、特に、子どもへの支援に高い困難が生じた人に有効であった。参加者のテキスト回答からは、今後、子どもの背景を注意深く観察し、子どもに寄り添っていく予定であることが示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 Kageyama Masako, Yokoyama Keiko, Ichihashi Kayo, Noma Shintaro, Hashimoto Ryota, Nishitani Misato, Okamoto Reiko, Solomon Phyllis	4. 巻 23
2. 論文標題 A peer-led learning program about intimate and romantic relationships for persons with mental disorders (AIRIKI): co-creation pilot feasibility study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMC Psychiatry	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12888-023-05254-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kageyama Masako, Matsushita Atsunori, Kobayashi Ayuna, Sakamoto Taku, Endo Yasuhiro, Sakae Setsuko, Koide Keiko, Saita Ryotaro, Kosaka Hiyuka, Iga Satoko, Yokoyama Keiko	4. 巻 23
2. 論文標題 Video-based e-learning program for schoolteachers to support children of parents with mental illness: a cluster randomized trial	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMC Public Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12889-023-15426-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kageyama Masako, Sakamoto Taku, Kobayashi Ayuna, Hiramata Akiko, Tamura Hiroyuki, Yokoyama Keiko	4. 巻 11
2. 論文標題 Childhood Adversities and Psychological Health of Adult Children of Parents with Mental Illness in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 214 ~ 214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/healthcare11020214	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kageyama Masako, Koide Keiko, Saita Ryotaro, Iwasaki-Motegi Riho, Ichihashi Kayo, Nemoto Kiyotaka, Sakae Setsuko, Yokoyama Keiko	4. 巻 21
2. 論文標題 A randomized controlled study of an e-learning program (YURAIKU-PRO) for public health nurses to support parents with severe and persistent mental illness and their family members	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Nursing	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12912-022-01129-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蔭山 正子、横山 恵子、坂本 拓、小林 鮎奈、平間 安喜子	4. 巻 68
2. 論文標題 精神疾患のある親をもつ子どもの体験と学校での相談状況：成人後の実態調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 131 ~ 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.20-036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林 千華、蔭山 正子	4. 巻 9
2. 論文標題 精神障がい者をパートナーにもち子育てをする配偶者の経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学会誌	6. 最初と最後の頁 27 ~ 36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15078/jjphn.9.1_27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池谷 実歩、蔭山 正子	4. 巻 23
2. 論文標題 精神障がいを抱えながら育児を継続している親の経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌	6. 最初と最後の頁 13 ~ 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20746/jachn.23.3_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 羽尾和紗、蔭山正子	4. 巻 8(3)
2. 論文標題 精神疾患を患う母親をもつ子どもの生活体験と病気の気づき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学会誌	6. 最初と最後の頁 126-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15078/jjphn.8.3_126	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳥田愛理沙, 蔭山正子	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪大学看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 40-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林 千華, 蔭山 正子	4. 巻 9
2. 論文標題 精神障がい者をパートナーにもち子育てをする配偶者の経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学会誌	6. 最初と最後の頁 27 ~ 36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15078/jjphn.9.1_27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 蔭山 正子, 横山 恵子, 坂本 拓, 小林 鮎奈, 平間 安喜子	4. 巻 68
2. 論文標題 精神疾患のある親をもつ子どもの体験と学校での相談状況: 成人後の実態調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 131 ~ 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.20-036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池谷 実歩, 蔭山 正子	4. 巻 23
2. 論文標題 精神障がいを抱えながら育児を継続している親の経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌	6. 最初と最後の頁 13 ~ 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20746/jachn.23.3_13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hiyuka Kosaka, Masako Kageyama
2. 発表標題 Difficulties in living of adult children of women with schizophrenia spectrum after adulthood : A qualitative descriptive study
3. 学会等名 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rio Sakata, Masako Kageyama
2. 発表標題 The barriers to romance and marriage that people with mental disorders experience, and the support to overcome these barriers
3. 学会等名 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蔭山正子
2. 発表標題 精神障がいのある方や家族への支援
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池谷実歩, 蔭山正子
2. 発表標題 精神障がいを抱えながら育児をしてきた親の経験
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小西はる子, 蔭山正子
2. 発表標題 精神障がいをもつ母親に対する育児支援に関する文献検討
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池谷実歩, 蔭山正子
2. 発表標題 精神障がいを抱えながら育児をしてきた親の経験
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小西はる子, 蔭山正子
2. 発表標題 精神障がいをもつ母親に対する育児支援に関する文献検討
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 YPS横浜ピアスタッフ協会、精神障害当事者会ポルケ、蔭山 正子、横山 恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 精神障害者が語る恋愛と結婚とセックス	

1. 著者名 蔭山正子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ペンコム	5. 総ページ数 218
3. 書名 心病む夫と生きていく方法	

1. 著者名 YPS横浜ピアスタッフ協会、精神障害当事者会ポルケ、蔭山 正子、横山 恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 精神障害者が語る恋愛と結婚とセックス	

1. 著者名 蔭山正子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ペンコム	5. 総ページ数 218
3. 書名 心病む夫と生きていく方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>愛する力を磨くピア学習プログラム「あいりき」 https://kageyamaresearch.wixsite.com/airiki 精神障がいを抱えながらの子育て支援研修プログラム「ゆら育プロ」 https://kageyamaresearch.wixsite.com/yuraiku-pro 精神疾患の親をもつ子どもの会研究関連情報「私ここライブラリー」 https://kageyamaresearch.wixsite.com/watashikoko</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	栄 セツコ (Sakae Setsuko) (40319596)	桃山学院大学・社会学部・教授 (34426)	
研究分担者	茂木 りほ (Motegi Riho) (40760286)	国立保健医療科学院・その他部局等・主任研究官 (82602)	
研究分担者	横山 恵子 (Yokoyama Keiko) (80320670)	横浜創英大学・看護学部・教授 (32727)	
研究分担者	宮川 淑恵(濱島淑恵) (Miyakawa Yoshie) (30321269)	大阪歯科大学・医療保健学部・教授 (34408)	
研究分担者	谷口 恵子 (Taniguchi Keiko) (50383138)	東京福祉大学・心理学部・講師 (32304)	
研究分担者	酒井 佳永 (Sakai Yoshie) (60349008)	跡見学園女子大学・心理学部・教授 (32401)	
研究分担者	前田 直 (Maeda Sunao) (80723494)	杏林大学・保健学部・助教 (32610)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------